

---

# 僕とバカと召喚獣達！

麗也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕とバカと召喚獣達！

### 【Nコード】

N3080Z

### 【作者名】

麗也

### 【あらすじ】

ここ文月学園に転入してきた影譲麗也は2・F組の仲間達と楽しく無事にちゃんとした生活を送ることができるようだろうか？  
そして幼馴染との再会と展開は・・・

## キャラクター紹介（前書き）

初めまして！初めて投稿してみました。下手くそですいません！  
こんな下手な小説をみてくれたらとても嬉しいです。

## キャラクター紹介

### キャラクター紹介

### 主な登場人物

影譲麗也 木下姉弟との幼馴染。観察処分者同様の力が使える。明久の次にバカ。

吉井明久 文月学園を代表するバカ。観察処分者。

坂本雄二 小学校の時は神童だった。不良。頭がとてもキレる。

土屋康太 ムツリーニ 保健体育以外は何もできないバカ。写真を撮るのが得意。  
すぐ鼻血をだしてしまふ。料理が得意。

木下秀吉 演劇部に所属している。文月学園が誇る美少女？声帯模写ができる。

霧島翔子 学園首席。一途な女の子。自称坂本雄二の妻。

姫路瑞希 学年トップ？。料理の腕は殺人級。吉井明久に恋をしている。

島田美波 ポニーテールと釣り目が特徴の女の子。ヤンデレ。吉井明久に恋をしてい

る。

木下優子      BL本が大好きな女の子。なぜか顔はカワイイはずなのにもてない。

清水美晴      同性愛者。島田美波のことが大好きな女の子。

久保利光      清水美晴同様同性愛者。吉井明久が大好きな男の子。

工藤愛子      ボーイッシュな女の子。保健体育は実技が得意。人をからかうのが好き。

＼ストーリー紹介＼

主人公影譲麗也は高校2年生の春にここ文月学園  
に転入してきた。

そして、2-F組に入るがいったいどんな生活を  
送るのだろうか？

そして、久々に会う幼馴染の反応は？

## キャラクター紹介（後書き）

これから作品作りに入りますが、なるべく下手に書かないようになんばりたいです。では、期待している人はあまり期待しないで下さい。でも、頑張っって自分なりに書いてみます！

〜出会い〜（前書き）

さっそく第一話投稿してみたいと思います！書き方は下手くそですが、そんなの気にせずに読んで頂けたら幸いです。



〜出会い〜

影譲 side

月学園に僕は今日

桜が満開に咲くここ文

転校する・・・ちよつと心配だ・・・。

第一この方に来るのは大分久しぶりだ。

この僕のことなんて誰も覚えていないと

思うし、だいたい僕の事を覚えている奴

がいたとしても僕の知らない奴だろう・・・

たぶん・・・。もし、僕の幼馴染がこの

学校にいたらな〜。・・・。

つて！こんな事してられなかったんだ！

急げ、急げー！早くしないと遅刻しちゃ

ドンっ！

いなかった

「痛っ！す、すみません！前ちゃんと見て  
ものだから！」

めんね・・・って

「いてて・・・僕も前見ていなかったからご  
君誰？」

ます！よろしく

「あっ！僕、今日転校する影譲麗也と言  
お願いします！あの・・・君は誰ですか？」

君と同じ

「あっ！僕？僕は吉井明久って言う名前で  
学校の生徒だよ・・・って！もうこんな時

間！悪いけど

僕もう行くよ！遅刻しちゃうと鉄人に怒

られちゃうから

ね！君も早く行ったほうがいいよー！

「・・・」

あ・・・行っちゃった・・・僕も急いだ方が

いいや。

それにしてもこの学校（文月学園）に入

る前に

振り分け試験？って言うテストをやった

けど大

ぶんと

丈夫かなー？僕、テストやる前にずい

よな

遊んじやったから全くできなかったんだ

最低と

たぶん僕の予想で絶対に点数は悪いな・  
どうしようか？もし、点数が悪すぎると

な

言われているFクラスに入っちゃうもん

うせ良い

本当にどうしようか？まっ！いいか！ど

んまり悪い

点数なんてとれるわけないし、それにあ

マイナス

方向に考えるとろくなことはないしな！

うんうん！

思考はダメ！プラス思考、プラス思考！

大丈夫さ・・・

きっと大丈夫なはず・・・うん、きっと

まあしかたがないよ！

てFクラスに入るしか

「やっぱり、こんな点数だよな〜ま、

遊んでいた自分が悪いんだし・・・諦め

ないよな〜」

スに入る事に

なんてこった・・・よりによってFクラ

やっぱり嫌だ

なるなんて・・・どうしよ、どうしよ！

いなくて孤独のまま

な〜・・・もしも、知っている奴一人も

うよ？

一年を過ごす事になったら僕泣いちゃ

題のFクラスの

そんな事を考えながら歩いていると問

いる・・・

前に来ていた・・・嫌なオーラが漂って

担任と思われる

そんな事を考えていると教室の方から

・なんだろうっ？

男性がクラスの皆に何かを話している・

担任（福原慎） 「それでは今日は転校生が来ているので  
皆さんに紹介を

きてください。」

したいと思います・・教室に入っ

・確か誰かが

あっ！僕とうとう呼ばれちゃったよ・・

のは、最初に決

言っていたなー！人の印象って言う

ら皆を圧倒させる

まるって・・うん！最初で決まるのな

ってやるぞー！もう、

ような自己紹介をしてやるー！うん！や

決心はしたぞー！うん！やってやるっ！

担任（福原慎） 「どうしたんですか？入ってきてもいい  
んですよ？」

そんな考えをしている内にどうやら呼

ばれたようだ・・

ってやるっ！

もう決心はしてある！よし！堂々と行

は影譲麗也と

「失礼しまーす！まず、初めに僕の名前

お願いしまーす！」

申します！これから一年間よろしく

クラスの皆」・・・・・・・・・・・・・・・・

か皆僕の事を見る

え？ちよつと唐突すぎたかな？なん

いう視線で見ている

視線が「バカだ・コイツ・」って

っ？

よ？いったい何がいけなかつたんだろ

ことごといて

そんな考えをしている時、誰かが僕の

しゃべっていた・・・

たひとだ！えーっと

「あ！あの人確か校門の前でぶつかっ

確か名前は・・・・・・・・」

「影譲麗也じゃろっ？おそぶく・・・」

よ……って！なんで

「あ！そうそう！確か影譲くんだった  
秀吉影譲くんのこと知ってるの？」

しの幼馴染じゃから

「知っておるもなにも……麗也はわ  
のう……」

クラスの皆「えええ——————」

「！！！」

んん

そいでしゃべっていたのは、吉井く

僕の幼馴染だった……

く出会いく（後書き）

いかがだったでしょうか？ほとんど書き方は原作と同じになっちゃいました。すいません！書き方があまり僕分からないのでちよつと同じになっちゃいましたが、もう少し！後、ほんのもう少しでいいんです！そうしたら、自分オリジナルな書き方を見つけてみせますので、もう少し、この書き方でよければこの小説を見ていただくとありがたいです。後、この小説を見ていただきありがとうございます！

\*説明下手ですいません。あと、追加のキャラクター紹介 今更すいません！

福原慎 明久達の担任。

鉄人 西村教諭のこと。あと、補習担当の先生。

後、自分のことを小説に出していますが、

すいません。これもやっぱり欲望といいま

すか、欲と言いますか・・・とにかく自分

を出しちゃってすいません！でも、そんな



小説でもよければ、見てください！みていた

だければ、幸いです。

## 〱紹介〱(前書き)

一気に今日で二つ投稿させて頂きます！みていただければこちらとしても幸いです。今回は、ちょっとタイトルがタイトルなだけに小説はほんの少し短いです。

〜紹介〜

影議side

った

「いや〜まさか秀吉がいたとは思わなか

よ〜〜!」

また

「いや・・・わしも正直びっくりじゃぞ?

麗也と会うとは思わなかったからのう。

「

秀吉

「いや、僕の方がびっくりだよ!それに

に会えて嬉しいし!」

わし

「そう言ってもらえると嬉しいのうー!

も会えて嬉しいのじゃ!」

はど

「あれ?そういえば優子は?秀吉、優子

どこにいるの?」

也は

「姉上のことか?そうじゃったな・・・麗

ラス

なにも知らぬからのう・・・姉上はAク

にいるのじゃ。」

の優  
んだ  
「えっ！あの優子が？昔はバカだったあ  
子がAクラスだって？へえー成長した  
な。優子も。昔は・・・」

明久「あのー楽しく話している途中悪いけど・

と睨  
んで  
「須川くん達が思いつきり影譲くんのこ  
んでいるよ・・・ほら。」

『えっ？』

こと  
うう・・・本当だ・・・思いつきり僕の

いけ  
睨んでいるね・・・どうしてか分からな

ね・  
ど、これ以上秀吉と話さない方がいい

・・・まだ話したいけど。

の会  
（ここだけの話、須川くんは異端審問会  
長だから、あんまり彼の前で女子とイ

チャ

イチャしゃべったり遊んだりしちゃう

メだ

よ？殺されちゃうから・・・）

うと

僕にしか聞こえない声で吉井くんが言

の発

その場から離れた・・・でも、吉井くん

言はちよつと疑問に思う所がある・・・

秀吉は女の子じゃないんだけどな〜

ま！いつか！気にしないで！気にしないで！

こと

「あ！影譲くん、まだ秀吉以外の人達の

は知らないとおもつから、一人ずつ自

己紹

介しようよ！」

?????」おう・・・それがいいな。」

そう言つと背の高い頭がつんつんな人

が自

己紹介を初めた・・・

でも

よろ

「俺の名前は、坂本雄二ってんだ。代表坂本でもどっちでもいい・・・これからしくな。」

と寝

そうやってダルそうに自己紹介をする

てしまった。大丈夫なのかなー？

????「じゃあ、次は俺がやる・・・」

にで

そう言うとお柄な体格をした男性が前

て自己紹介を初めた・・・

「・・・名前は土屋康太・・・」

たが

名前だけ言うとササッと小走りに走っ

う？

去り際に何かを落とした・・・なんだろ

う？

カメラ？カメラなんか何に使うんだろ

の・

「これは・・・授業の様子を撮るためのも  
・・・」

「」「」嘘だっ！」「」

たけ

うん？ものすごいツッコミをいれられ

れに、

ど、別に変なこととは言っていないよっそ

ミを

さっきまで寝ていた坂本くんもツッコ

とっ

いれるくらいだから、きっと嘘が皆に

てはもう見え見えなんだろう・・・。

に平

「おい！ムツツリーニ・・・影譲の前でな

にい

然と嘘つくんだ！いいじゃねーかべつ

！！

つかは知ることなんだから・・・影譲！

このカメラはなあーいやらしいことを

する

「ために使うカメラだ！」

「へえーそうなんだー！ーってええー！

それって犯罪じゃないのー！」

「……………！！（ブンブン）」

必死に首をふっているけどもう遅いよ

???

事実知っちゃったし……

「さて！これで一応この場にいる奴全員

は紹

介し終えた……」

「まだでしょー！ー！ー！ー！まだこの

僕が

紹介をしていないでしょー！全く……

雄二には呆れるよ……」

「お！すまなかった……明久がまだだっ

たな

……いいぞ……さっさとやれ。」

「ったく……じゃあ改めて紹介するね！



僕の

影譲

の！

――

名前は吉井あきひさ……ってなんで

くんと秀吉以外の二人は帰っちゃった

そんなに僕のこととはどうでもいいのお

……

「……」

「吉井くん、行ってしまったね……」

「皆、行ってしまったのう……」

僕はある意味このクラスでやっていく

こと

ができること、この時心の底からおもっ

た・

……

〱 紹介〱 (後書き)

すいません！予定より文が長くなってしまいました・・・でも、こんな小説でも読んで頂けると僕としては嬉しい限りです！

く誘いく(前書き)

応援頂いているようで嬉しいです！今回は秀吉と麗也が遊ぶ話です！見ていただけたら幸いです！

影議 side

あーやつと授業全て終わったー！  
慣れていないせいかずいぶんと時間を  
長く感じたなー！さて！もう授業  
は終わったし・・・もう疲れたし、帰  
ろうかなー・・・

と、そんなこと思っているとひとりの  
人が近づいてきた・・・うん？よく見た  
ら秀吉じゃないか！いったいなんの用  
だろう・・・

「麗也よ・・・今日・・・ひまかのう？」

「えっ！別に用事はないけど・・・」  
「だ、だったら今日久しぶりに遊ば  
ないかのう！わし、何もすることが  
なくて悩んでおったんじゃが・

「・・・どうかのう?」

「うーん・・・どうしようかな? 今日、暇じゃないけど、疲れたからな・・・」

「あつ!別に無理じゃったらいいのじゃぞ?」

あ!そういえば秀吉と遊ぶのは久しぶりだな。ここで断ることもできるけど、せつかくの誘いだし、

なんか断るのも悪い気がするしな

「・・・ってアレ?僕ってこんな

優柔不断な男だっけ?と、とにかく

く!秀吉のせつかくの誘いだし、

遊んじゃおうか!

「いいよ!別に、僕も暇だったしさ!」

「ほ、本当かのう!じゃあ、帰ったらすぐに家に来るのじゃぞ?あつ

！わしの家は知っておるな？昔と  
変わらない所にあるからのう！じ  
ゃあのう！」

タタタタッ！

あ！行っちゃった・・そんなに嬉  
しかったのかな？ま！僕も久し  
ぶりに話せて嬉しいし！走ってか  
えろつと！

僕はなぜか足がとても弾んでいた  
・・・なんでだろう？

「ここだったよね？確か秀吉の家っ  
て・・・」

僕は自分でも早いと思われるほど  
早く秀吉の家に着いてしまった・

・・うんっ？確か前にはこんな所

に花壇なんてなかったはずなんだ  
けどな〜？ま、おおよそ考えつ  
くのは、たぶん秀吉のお母さんが  
飾ったんだろう・・・っと！そんな  
事よりも早くいかなきゃ！秀吉待  
たすのも悪いし・・・さっそくイン  
ターホンをおさせてもらおうかな  
？

ピンポーン

そうしてちよつと経った後にイン  
ターホンから秀吉の声が聞こえた  
・・・

「ちよつと、待つんじゃ。」

そうして数秒も経たないうちに秀  
吉がドアの前に来た・・・って早い

な！

「さっ！さっ！早く入るのじゃ！」

僕は秀吉の家に入るのになぜかド

キドキした・・・



く誘いく（後書き）

まだ秀吉と遊ぶ編はまだ終わっていないのでまたよんで頂くと幸いです。

く思い出話く（前書き）

今回でこの話が終われるよう、頑張って書きます！読んで頂くと嬉しいです！

影讓 side

「おじゃましまーす！」

僕はなぜか急ぎ足で家の中に入った・

やっぱりちょっとおかしい！おかしい

よ？

僕・・・どうしちゃったんだろう・・・

そうやって考えていると、いつの間に

か秀

吉の部屋に入っていた・・・

「さてっ！何して遊ぼうかのう 麗也！」

「ちょっと待って！秀吉！さっきから取

り乱

し過ぎ！ちょっと落ち着こう？ね？・・・

「

「そ、そうじゃったな・・・ちよつと気が

乱れ

ていた・・・すまん・・・」

気に

「あっ！別に謝らなくてもいいよ！特にしてないし・・・」

「そうか？いやーやっぱり麗也は優しいのう。」

「そ、そんな事言ったら照れるな〜・・・  
な事よりもなににして遊ぼうか？」

「そうじゃのう〜・・・いや〜実はこれい  
なにも考えてなかったのじゃ・・・どう  
の〜？」

「う〜ん・・・僕もここに来る前になにも  
聞いてい

「なかったし、持ち物もなにを持ってく  
るのか聞

「いていなかったし・・・本当にどうしよ  
うか？」

「・・・うん？そういえば秀吉とは学  
校ではあ

須川くん

まりはなせなかつたな〜ま！ほとんど

ったって

たちの目線がこわくてあえて話さなか

そうだ！

言う事実があるんだけどね・・・あつ！

久しぶり

久しぶりっていうのもあるし、秀吉と

あるし・

に話そうかな〜？僕も話したいことが

・・・うん！決定！

話とか、

「あ、あのさ〜秀吉、僕と久しぶりに会

・や

思い出話とかしないかい？ほら！その・

メかな？」

りたい事とか考えつくまでさ〜・・・ダ

も麗也と

「・・・えっ？そ、そうじゃの〜！わし

あさっそ

話したいことがあるし・・・よし！じゃ

？」

くなにか話そうとしようかの〜麗也よ

揺しすぎ

「そ、そうだね〜ってさつきから秀吉動  
じゃない？なにかあったの？」

だつてさ

「そ、それはこちらのセリフじゃ！麗也  
つきからオロオロしてるじゃろっ？」

ちよつと

「いや〜なんか秀吉と対面するとなんか  
昔と違って緊張するんだよね〜なぜか

」

「・・・すまん。それはわしもじゃ・・・」  
「・・・」

たいに普

しばしの沈黙・・・う〜んなんか昔み

どじつよ

通に話すことができないかな〜？・・・

つかない？・・・

らノック

そんなことを考えているうちにドアか

がかかった・・・

トントン

「・・・あ、誰なのじゃ？」

「もう！私に決まってるじゃない〜いい

わよ?」

からあけ

ガチャ

「お、おー姉上じゃったか・・・いったい

何の用じゃ？」

「いや・・・ただマンガを取りに来た・・・

ってそちらの

男性は誰？」

「ん？姉上よ・・・もう忘れてしまったの

かのつ?麗也

じゃ。影譲麗也じゃ・・・」

「あ！麗也なの〜！久しぶりね〜元気だ

った?」

「うん・・・おかげさまで・・・」はあ

〜〜」

「うん?なによ?柄にもなくなかなりおち

こんどるけど

「・・・何かあったの？」

「うむ。実はのう・・・」

（説明中）

つて二人とも

は一つね・・・」

教えるのじゃ。」

！」

素直な気持ちを

いのちよ〜」

と?。」

説明してくれる

「んもう!だから!思ったことをそのま

かな〜?」

「・・・優子、もうちょっと分かりやすく

「・・・?言葉にしてぶつける・・・じゃ

そのまま言葉にしてぶつけちゃえばい

「それはね・・・なにも考えずにお互いの

「そうだよ!優子!さつさと教えてよ!

「む?姉上よ・・・もったいぶらずに早く

緊張してるんだ〜・・・だったら解決策

「ふ〜ん・・・なるほどね。久しぶりに会



ま言っちゃえば

いいってことー！」

「思ったことをそのまま言っ……」

「そうよ……だって私からみたら互いに

てるようにみえるもの……」

ちょっと遠慮し

「姉上から見たらむしろはそんなふうに

たのか……」

見えたのじゃっ

「確かに……優子の言っとおりかもね……」

「

「ま……わたしからの意見はここまでよ……」

・後は二人で

どうかしなさい……」

ガチャ

「うん……確かに僕もちょっと遠慮して

た部分があつた

かも……」

「わしもじゃ、麗也……」

「うん！じゃ、優子の言っただ通り、心

に思ったことを

すぐに言っちゃおうかな〜？」

「うむ。わしもこれからそうすることに

するのじゃ。」

「じゃ！改めて話そうか！秀吉！」

「そうじゃの！麗也！」

そうやって秀吉と昔のことや今のこと、

楽しかった事

や困難だったこと、色んなことを話し

ていたら辺りは

もう暗かった・・・もう帰らなくちゃ！

「ごめん秀吉！もう暗くなったからそろ

そろ帰るね？」

「そうじゃの〜以外に早かったのう・・・

時がたつのは・

「・・・

「そうだね・・・また今度遊ぼうね！秀吉

！今日はすごく

楽しかったよ！じゃあね〜！」

「じゃあのう！麗也！わしもすごく楽し

かったのじゃ！

「・・・」

「また、遊ぼうのうー！」

「うん！じゃあね〜秀吉またね〜！・・・」

「行ってしまったのう・・・」

「あんた達、あの後うまくいったのね・・・」

「

してるぞいー！」

「うむ！これも姉上のおかげじゃ！感謝

「あ〜ら・・・私なにかいったかしら〜？」

「相変わらず素直じゃないのう・・・まる

で素直じゃない

「麗也みたいじゃのう・・・」

「ハックション！うう・・・誰か僕のうわ

さしたのかな〜？」

「そしてそんなことを思っているながらも

頭には今日のこと

でいっぱいだった・・・。

く思い出話く（後書き）

いかがだったでしょうか？結構長く書いてしまいました。最後まで読んでもらえたら幸いです。

〈召喚戦争〉（前書き）

あゝ本当にすいません！二日間もやらなくて・・・いろいろ事情があったもので・・・

そんなことよりも次に書く小説は試験召喚獣戦争編です！多少原作とカブりますが（もしかしたらすごくカブるかも）、見ていただけたら幸いです。

〜召喚戦争〜

影譲 side

「うん・・・今日はやけに眠たい・・・」

本当に今日は眠すぎる・・・へたをしたら授

業中にも

寝てしまいそうだ・・・それにしても今日は

天気が良いな〜

そういう日には良いことがあるってよくお

じいちゃんが

言ってたな〜よし！そうかんがえると本

当にいいことが

起きそうだ・・・

そうやって考えていると後ろから走ってき

ているような音が

聞こえてきた・・・

「おはよつなのじゃ〜！麗也！」

「うん？誰かと思ったら秀吉じゃないか・・・」

おはよう〜！秀吉〜！」

朝からまさか秀吉に会うなんて思わなかつたな〜。・・・

もしかしたらおじいちゃんが言ってた良いことってこつこついついこつかな〜？

「う〜ん・・・やっぱり秀吉の笑顔を見るとなんか元気が出てくるな

〜。」「

「そ、そうかの〜そんな事を言われると照れるのじゃ」

「ううん！そんな事ないよ！だって本当のことだもん！ホラ今だって

「こんなにげん・・・き・・・ふうわ〜あああ〜」

「お主・・・元気になったと言っておるくせに大分眠そうじゃの〜  
「いったい昨日の夜はなにをやっていたのじゃ？」

「う〜ん・・・確かゲームと遊びだったよ・・・  
「それですつとやっていた

「ら、いつの間にか3時になっちゃってさ〜  
「それでかな？眠いのは・・・」

口を開けるだけであくび

そのせいか・・・な・・・ふわあああー・・・  
がでる・・・」

「お主はどれだけ暇なのじゃ・・・もつと自分を大切にするのじゃぞ?」

「うん・・・分かった・・・これからは夜の1時までにするよ・・・」

「それじゃあ変わらんじやろう・・・」

秀吉とそんな何気ない話をしているといつの間にか教室に着いていた・・・

「皆々おはよう〜!!」

僕は眠気を押し切ってあいさつをした・・・  
うんうん!あいさつは大切

だよね!

「・・・影譲・・・麗也・・・だよな?」

そうやってあいさつを言うと須川君?とおぼしき人物が近づいてきた・・・

「うん!僕が影譲麗也だけど・・・何か用?」

「そうか・・・貴様が影譲麗也か・・・皆々コイ



ッを今すぐ拘束しろー！」

「ハッ！須川会長！」

「えっ？なになに？なんか僕やったく？って痛い  
痛い！無理やりやらない

でよ！それにそのガムテープ何？まさか、僕の口に  
貼る気じゃないよね？

本当にやめ・・・ムグググ！」

「影譲麗也確保！これより異端審問会をはじめ  
める！」

う・・・なんだなんだ？なにが起こってる  
んだ？

「被告の罪状は？」

「ハッ！被告影譲麗也は  
「朝から女子とイチャイチャしながら登校をしていた」！です！」

「そうか・・・審議の結果・・・判決が下された。  
・被告をロープ無しバンジー  
ジャンプに処する・・・もういぞ、被告の  
ガムテープを外せ！」

「・・・プハッ！ハーハーまったく・・・君たち  
は僕を殺す気かい？」

登校するなど・・・

『当たり前だ！女子とイチャイチャしながら  
死刑に値する行動だぞ！！！！！！』

「それにしてもなんだい？その、ロープ無し  
バンジージャンプって？」

「そのままの意味だ・・・」

「うん？待て待て僕・・・冷静に考えるんだ・・・  
普通バンジージャンプって

「というのはロープがあるはずだ・・・そして今  
彼らがやるつもりしているのは

「ロープ無しバンジージャンプ・・・これすな  
わち意味することは・・・」

「死に値するっていうこと・・・ってことは君たちは僕を殺す  
っていうことか！」

「今頃気づいたのか・・・バカか！お前は・・・」

「ハッ・・・君たち・・・分かってないな～そんな  
ことしたらどうなるかって・・・」

「知っている、そんなことは・・・」

「だったら今すぐやめた方がいいよ？そんな

こと・・・」

「これをやったら俺はこのクラスの英雄になれる・・・」

「君たちはバカかい？」

「そんなことを言ってる間に僕の体は窓のすぐそばまで来ていた・・・」

「うう・・・結構高いな・・・」

「須川よ！やめるのじゃ！そんなことはいま

すぐ！」

「秀吉くっ！助けて僕をくっ！！」

「分かった！いま、助けに行くからうう！」

「よかった・・・やっぱり持つべきものは友達

だね！秀吉には感謝しきれ

ないよ・・・」

「ダメだ・・・たとえ秀吉だからといって刑の執行を邪魔させる訳には

いかない・・・」

「ええい！こうなったらすぐに鉄人を呼んでくるのじゃ！とくごじとくごで

麗也！もう少しだけ耐えるのじゃぞ？」

「え？行かないで秀吉！秀吉ーーーーー！」

「よし・・・そろそろ落とすか・・・」

「ま、待って！まだ落とさないでよ！頼むか

らわー！」

「・・・じゃ

ドンっ！

「うわ~~~~本当に死んじゃうってー！・・・

」。

僕はこの時本当に死ぬんだなって改めて思

った・・・

「ふーほ、ほんとうに危なかった・・・木の

枝に感謝だな・・・」

僕は奇跡的に助かった・・・落ちてから地面

に着いてしまっ

死ぬんだろうなって思っていたけど・・・地

面に着く前に木の枝

感謝だな・・・

に引つかかって助かった・・・自然の恵みに

っさと席に座れ・・・」

「おい・・・お前らいつまで遊んでるんだ。さ

いるように見えるって

あ、確か坂本くんだけ？いまのが遊んで

だ？

このクラスの人たちはどこまでおかしいん

と質問するぞ？」

「よし・・・全員座ったな・・・唐突だがちよっ

ないか？」

「・・・お前ら、このクラス環境に不満は

!!!!!!」

「大ありじゃあああ—————!!!」

壊れた窓に

す、すごい・・・ま、確かにそうなるよね・・・

壊れたちやぶ台・・・このクラスじゃなかったとしても誰もが思うことだ・・・

挑もうと思っ・・・」

「そこでだ・・・俺達はAクラスに召喚戦争を



〈召喚戦争〉（後書き）

すみません！序盤に思いつきり影譲麗也と秀吉のイチヤイチャ？なものを書いてしまつて・・・でもどうしても書きたかつたんです！そこはご了承ください・・・

次は召喚戦争の説明とDクラス戦に入るので見ていただけたら幸いです。後、今回長くなりすぎてすみません！後最後にもう一つ！秀吉以外のキャラもちゃんと出させてみせます！・・・たぶん・・・いや、絶対に！

〜勝機〜（前書き）

え〜今回はDクラス戦のところを書きます。またこの作品も秀吉と麗也をイチヤイチヤしている場面が多いかもしれませんが、ちゃんとはかのキャラも出しますので読んで頂ければ幸いです。



〜勝機〜

影譲 side

『勝てるわけがない…』

『負けたら本当に負け犬になるんだぞ…』

『姫路さんがいたらもう何もいらぬい…』

くちぐちに皆はそういつて反対した…

一部の意見はおかしいと思つけど…

「そつだよ！雄二！いくらなんでも無望すぎると思つ

」！

まで

うん？誰かと思つたら吉井くんじゃないか。さつき

なんで静かだつたんだろ…

「…俺もそう思つ…」

また誰かしゃべつた…今度は土屋くん？だつた

と思つ

…

けど…なんでみんな今頃しゃべり始めたんだろ…

僕たちが吉井くん達の話聞いていなかったただけかな？

「でも・・・僕も無望だと思っな〜Aクラスに挑むのは・・・」

僕だって力比べができないほどのバカじゃない・・・相手の力だって分かるし、第一バカだけしかいない

このクラス

じゃちょっとAクラスはキツすぎる・・・いや、大分だ

「まあ待て・・・最後まで話を聞け・・・誰もAクラスに挑むなんて

言っていない・・・それに、まだ準備もあるしな。」

「え？でもさっき雄二はAクラスと試召戦争をやるって言ってた

じゃないか？」

「誰もAクラスに挑むなんて言っていない・・・あくまでそれは最終目的だ・・・それにさっきも言ったように準備が必要だ・

なことはそして誰かがこういったな・・・無望・・・だと。そんなことはい・・・だよな、ムツツリーニ・・・それと姫路のス

カートを

覗かないで前に来い・・・」

「・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「え、えええ！」

そう言つと姫路さんはスカートを隠した・・・ってい

うかよく

普通に覗こうとするな～さすがは、ムッツリーニっ

ていう

異名を持った男だ・・・僕だつたらもうちょっと手

の込んだ

やり方をするけど、彼はそんなことはしない・・・う

くん・・・

この男、ある意味すごいな～

「ここにいる男こそ、あのムッツリーニだ。」

『な、なんだと？奴がそのムッツリーニだと？』

『い、いや・・・本当かもしれない・・・さっきだって下

心を

あんなに必死になって隠していたし・・・』

土屋くんはバレているにも関わらずに畳についたあ

とを

ない

必死に隠そうとしている・・・やはり異名は伊達じゃ

・・・!

「????」

姫路さんは頭をおさえて考えていた・・・そっか・・・

優等生の姫路さんには無縁の言葉だもんな〜・・・

誰か意味を教えてあげればいいのに・・・

「もちろん、姫路も戦力の中の一人だ・・・説明をし

なくても

実力は皆分かっているはずだ。」

「たしかに・・・彼女ほど頼りになる人はいないな〜」

「ああ。姫路さんがいれば、Aクラス打倒も夢じゃな

いぞー!」

みんな思い思いの言葉を言っている・・・ま、普通に

考えればそうなるよね・・・

「そして、木下秀吉だっている。」

『おお！確か演劇部のホープだったような・・・』

『あの木下優子の・・・』

んでも

秀吉に関しちゃ僕もそうだと思う・・・いろいろとな

できるし・・・手が器用だからな

「もちろん、この俺も全力をだす。」

『確かあいつは小学生のとき神童だったよな？』

『ということは、実質Aクラス並みの奴が二人いるっ

てことか？』

おお！ということは言ってみれば無敵のクラスじゃ

ないか？

僕はさておき、そんな実力者揃いのクラスだったら

Aクラス打倒

も勝機がある！

「それに、吉井明久だっている。」

シーン・・・

「あのさ、雄二・・・僕を才子扱いしないでほしいんだ

けどー！

あーあ・・・せっかく士気も上がっていたところなの・・・

にビシッ！  
坂本くん・・・それは言っちゃダメだよ。せめて最後

いそう  
と決めてほしかったな。これじゃあ吉井くんがかわ

だよ・・・

「ちなみに・・・明久は観察処分者だ。」

『・・・それってたしかバカの代名詞じゃなかったか

？』

「違うよ！ちょっとお茶目な高校生が貰う称号みたいな物だよ！」

「そうだ・・・バカの代名詞だ・・・」

「はつきり言っな！バカ雄二！」

観察処分者・・・たしかきいたことがあるぞ・・・え

ーっ・・・

のを

意味は確か教師の雑用係で力仕事とかいった類のも

特例として物に触れる事ができる召喚獣でこなすと  
いった・・

まあ・・用は教師の雑用係といった具合だろう・・  
でも・・ちょっと懂れるなぐものに触ることのでき  
る召喚獣

にも  
があるって・・でも、この観察処分者の欠点は自分

ツクの  
ダメージが返ってくる・・すなわち、フィードバ

いし・・  
ことだ・・それに召喚者は自由に出すこともできな

処分者・・  
当然、そこにメリットはない・・だからこそその観察

日頃の行い  
凄いこともなければ便利でもない・・成績が悪いや

と呼ばれる  
が悪い生徒に与えられるペナルティ。バカの代名詞

所以はそこにある。

『だとしたら、戦闘の時もし召喚獣がダメージを負っ

たら、

召喚者自体もダメージを負うってことだろ?』

『だよな・・・だとしたらおいそれと召喚ができない奴が一人いるってことだよな?』

「その通り!だから僕はあまり戦闘に参加する気はないんだ。」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だから心配はするな・・・」

「・・・坂本くん・・・吉井くんがそこで泣いてるよ?」  
「見ているこちら側としてもすごくかわいそうな絵になっっている・・・」

ほんとうに吉井くんは悲惨だな・・・

「とにかく・・・明久、いまからDクラスへ宣戦布告しに使者となっ

ていますぐ行け・・・」

「え〜そういうのって確か下位クラスが行ったらひどいめに遭うん

じゃなかったっけ?」

「いいや・・・Dクラスはそんなことはしない。騙され



行ってみる。」

「うん．．分かった。僕、雄二を信じていってみる

よ．．」

らの拍手や

吉井くんはそう言つとDクラスの方にクラスの皆か

声援を受けながら行ってしまった．．本当に大丈夫

だろうか．．？

「騙された〜〜〜〜！！！」

だった．．．  
僕の目に映つたのはぼろぼろになった吉井くんの姿

だった．．．  
ま、おおかたこんな風になるようなことは予想して

いたけど．．

「雄二．．一応聞くけど分かつててこんなことさせた

？」

「分かっていたに決まっているじゃないか．．そんな

ことも

分かっていたら代表が勤まらんだろ．．」

「あんたは、本当に友達かい？」

っど・・・

この二人をみてふとこう思う・・・本当に友達？・・・

ディングを

「そんなことはどうでもいいとして・・・さっさとミ-

するぞ・・・」

「ちょっと待ってよ雄二、まだいいことは言っていないんだけど」

「！！！！・・・」

そう吉井くんが言うと坂本くんを追って屋上に行っ

てしまった・・・

「・・・さて。わしらも行こうとするかの？」

「うん。行こうか、秀吉！」

僕は弱干不安を抱きながらも屋上へと続く階段を

上った・・・

〜勝機〜（後書き）

え〜今回は念願の秀吉以外のキャラを引き立たせることに成功できました！でも、まだ島田美波がだせてないんですよね〜次辺りに出してみます！あと、秀吉もあまり今回はだせてなかったなので、次はこの二人を主にだしてみたいと思います！長いですが、読んで頂ければ幸いです。あと、感想やコメントもよければ出してください。

\*注意・・・所以という字はゆえんと読みます。

喚戦争

あともう一つ、試召戦争というのは、前作で出した召

喚戦争のことです。（これからずっと試召戦争で通していきま

## ミミーディング（前書き）

え、今回の話はミミーディングと麗也と秀吉のイチャイチャ？な話です。はつきり言ってこの試験召喚獣戦争編はもうちよっと長くなります。すいません！でも、こんな小説でもよかったら見てください。読んでくださったらこちらとしても幸いです。

くミーティングく

影議 side

僕たちは屋上でミーティングするため、屋上へと続く階段

に上っていた・・・そして上っている途中にある会話が聞こえて

きた・・・

「ちよつと島田さん！腕を引つ張らないでよ」

「だって、あんたがいつこうに動こうとしないからでしょ」！

「だって・・・さっきのDクラスの使者で疲れたんだもん！めんどくさそう

だし、僕は遠慮するよ・・・」

「駄目！吉井も早く来なさい！でないと・・・」

「でないと？・・・」

「あんたにDas Brechen・・・確か日本語で・・・」

「・・・調教」

「そ、そう！調教しちゃつわよー！」

「島田さん！調教って言葉じゃなくて・・・せめて教育とか

指導とかの言葉を使って・・・」

「じゃあ間をとってZuchthiggung・・・」

「・・・それは分からない」

「確か、日本語で折檻っていう意味だったかな？」

「それって、余計悪化していない？」

「うん？そうかしら？」

「そうに決まってるでしょ！それからムツリーニ！  
きみはなんでドイツ語の調教っていう言葉の意味  
を知っているのかな？」

「・・・一般常識」

「うん・・・もしかしたらムツリーニが言う常識って  
僕らが思う常識とちよっと違うのかな？」

「こら！あなたたち遊んでないでさっさと来なさい！」

「へいへい」

「返事は一回！」

「へい・・・」

そんな会話を聞きながら階段を上がっていくともう

屋上へと続く扉がもうそばまであった・・・

「開けるぞ・・・」

そういつと坂本くんは扉を開けた・・・

扉を開けると真っ先に迎えてくれたのは、心地よい、

とてもいい風だった・・・

うん・・・今日は洗濯日和だな！アレ？今日僕って洗濯物

干したっけ？・・・ま、いいか・・・

「じゃあ、これからミーティングを始める・・・っとその前に、  
明久・・・ちゃんとDクラスには宣戦布告してきたな？」

「う、うん・・・一応今日の午後について言っておいたけど・・・」

「そうか・・・だとしたら、まずは昼飯だな・・・」

「そうだとしたら、今すぐ食わないとね？」

「お前、ちゃんと食うものはあるのか？」

「うん・・・いつも通りだよ。」

「そうか・・・だとしたらお前はバカだな・・・」

「なんだと雄二ももう一辺言ってみる！」

「ああ！何度でもいってやる・・・お前はバカだ！」

「なんだと、クソ雄二！」

「ふ、二人ともちょっと落ち着いてください！その話はミーティングが終わってから聞きますから！」

うん・・・いつたいなんの話なんだろう？妙に気になる・・・

「ま、そうだな・・・じゃ、これからミーティングを始める・・・まず、俺達はDクラスに勝てなきゃAクラスなんて言ってもらえない・・・

だからまずはお前たちに一つ言っておく・・・協力をしてくれ・・・以上だ。」

「え、それだけですか？」

「ああ、それだけだ・・・」

「なんか、パツとしないな・・・」

「じゃあもう一つ付け加える・・・俺達は絶対に負けないクラス、最強のクラスだ・・・」

『さ、さいきょうのクラス・・・』

そのとき、坂本くんの言葉に一瞬本気でそう思ってしまった・・・



くミーンディングく（後書き）

すいません！なんか微妙な終わり方で！時間の都合であまり書くことができませんでした！それでも、読んで頂ければ幸いです。

く弁当、そして・・・（前書き）

え、皆さま、及び読者の皆さまのおかげにより、第9話まで書くことができました！そして、何よりびっくりしたのは、アクセスサイト数です！まさか・・・2000を超えるとは思いませんでした！これも、読者の皆さまのおかげです！そして、最後にこんな小説ですが、今後とも読んでもらえる嬉しいです！

く弁当、そして・・・

影議 side

「さ、さいきょうか〜うん・

・なんかあんまりパツと

こないな〜・・・」

僕は坂本くんがしゃべり終わった後についてしまった・・・

それもそのはず、こんな学年最悪貧弱なクラスが最強だなんて

誰もが思うはずもないからだ・・・

「ああ・・・俺らはさいきょうだ・・・どのクラスにも負けない・

・・・」

「だったら、なんで雄二は最初にDクラスを狙うの？僕らが仮に  
さいきょうだったとしたら、普通はAクラスを狙うんじゃない  
の？」

僕もそう思う・・・さいきょうだったとしたら、迷わずAクラ  
スと

戦うはずだ・・・Dクラスに戦いを挑むだなんて・・・そんなま  
わりくだい

仕方をしなくてもいいはず・・・

「なにに・・・Dクラスに挑むのは、今後の景気づけにしたいからだ・・・それに、」

Aクラスと戦うには重要なプロセスだしな・・・」

「ふむ・・・じゃったらなげにDクラスにいどむのじゃ？段階を踏んで

戦うとしたらEクラスじゃし、Eクラスと戦ったとしてもその

雄二

言うプロセスにもなるじゃろう・・・」

たしかに・・・秀吉の言う通りだ・・・DクラスよりもEクラスの方が勝率が高いし、わざわざDクラスに挑むという危ないつり橋を渡る

必要もないだろう・・・

「確かに秀吉の言う通りだ・・・Eクラスの方がまだDクラスよりも楽だからな・・・だが、俺らにとつちや初陣だ・・・初めに派手にやって

俺らはDクラスにも渡り合える力を持っていると示したいからだ・・・

だからこそ、初めはDクラスと決まっている・・・」

「え？EクラスよりもDクラスの方が楽だ・・・って、雄二もしかして

Dクラスと戦うのって結構つらいの？」

「ああ・・・少なくとも、Eクラスよりも遥かに強い・・・」

ええ！Eクラスよりも遥かに強いって・・・僕たちそんな奴らを相手に

できるのか？

「でも、だからといって負ける相手では無い・・・心配するな・・・

」

はあくよかった・・・それだったら安心して良いよね・・・

「さあ〜て・・・言うことも言い終えたし・・・昼食を食うか・・・」

うん？昼食といえば・・・なんかあったような・・・

「雄二・・・どこに行くんだい？」

ガシッ

「明久・・・なんの真似だ・・・」

「雄二もしかして忘れたの？」

あ！そうだった！たしか吉井くんの昼食の件だったよね・・・

「ああ・・・確かそんな事をいつていたな・・・」

「そうだよ！さっきも言った通り・・・僕のどこがバカなんだよ！」

「うん？話は簡単だ・・・お前がいつも食べているって言うてるものって・・・」

どうせ、塩と水だろ？」

「そのどこがバカなんだよ！」

いや・・・それってバカどころの問題じゃないでしょ？

塩と水って・・・そんだけでよく生きていけるな」

「吉井くん・・・それって、食べるって言わずに舐めるって  
いう表現の方があっていませんか？」

「ひ、ひめじさんまで・・・僕をバカにするのかい？  
ちゃんと砂糖だって食べてるよ！」

「あのさ、吉井くん・・・それも、舐めるって言わないかい？」

「まったく・・・影譲くんまで・・・」

「あの・・・吉井くん、食べるものがないなら私が何か  
作ってきましょうか？」

「へ？」

「よかったじゃないか明久・・・手作り弁当だぞ！」

「姫路さん・・・君は神さまだよ・・・」

「ふん・・・瑞希って吉井だけに作ってくるんだ」

「い、いえ・・・その・・・皆さんにも作ってきましょうか？」

嫌ではなかったら・・・」

「うん？俺らにも作ってくれるのか？」

「はい！」

「す、すまんが・・・わしは遠慮しておこう・・・」

「え、なんで秀吉は遠慮するの？」

秀吉にしては珍しい・・・なにかあったのだろうか？

「ほ、ほら・・・その・・・そんなにたくさん作ってきたとしたら、荷物が増えるじやろう？そんな、女の子にたくさん持たせては体に悪いじやろうから・・・」

「え？そんなことないですよ？別にそんなことは気にならないので・・・」

木下くんもいいですよ？」

「い、いや・・・わしはやめておこう・・・姫路よ・・・  
また別の機会に作ってくれ・・・」

「そうなんですか？ならわかりました！木下くんにもそれなりの理由があるかもしれないですし・・・また、別の機会に作ります  
「！」

「す、すまんのう・・・姫路よ・・・」

うん・・・おかしい・・・秀吉、なにか隠しているな？

「いえいえ、気にしないで下さい！ということは、全部で6人分作つてくるんですね？分かりました！それでは、明日にでも作つてきます！」

「よろしく頼むね！姫路さん！」

「おおっと・・・もうこんな時間か・・・悪いが、もうあまり時間はない。さつさと食つて、Fクラスに集合しろよ？それでは、解散！」

よし！解散になったな！昼食は秀吉と食べて、事情を

話してもらおう！

「ね〜秀吉？僕といっしょに昼食たべない？」

「・・・うむ？麗也か？そうじゃな、いっしょに食べようかのう！」

よし！誘いには乗ってくれた・・・後は事情を話すように言えば・

「う〜ん・・・結局なにも言わなかったな〜秀吉・・・」

食べている途中もずっと黙ったままだったし・・・元気もなかったな〜



・・・ひょっとして、お腹がいたいとか、何か言えない事情があるかも

しれないな

「よし・・・全員集まったな・・・やるぞもー！絶対に勝つぞー  
ー！ー！ー！」

『おおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

すごいやる気だ・・・まあ、普通はそうだな・・・

よし・・・僕も今考えていることは後でかんがえて・・・

今は戦争に集中しよう・・・！

午後になった・・・僕らは笛の音とともにまっさきにDクラス

に向かって走った・・・

戦争の開始・・・開戦だ！

く弁当、そして・・・（後書き）

今回は秀吉がちょっとおかしかった話になっちゃいました！おかしかった理由は

Dクラス戦の後で分かるので楽しみにしてください！後、毎回いいですが、この小説を読んで頂ければ僕としても幸いです。

## くDクラス戦く（前書き）

やっとこの試験召喚獣戦争の最も大事な部分、試召戦争を書くことができません！ここまで遅くなってしまつてすいません！良い作品を書けるように頑張るので、見ていただけたら幸いです。

## くDクラス戦く

影譲 side

「秀吉く前線部隊の僕達って最初に戦うんだよねく」

「そうじゃ。わしらの役目は最初に戦う、いわば奇襲部隊じゃ。どちらの攻撃が最初に決まるかで今後の戦闘状況、経過が決まってしまう・・気を引き締めて戦うぞい！麗也よ！」

僕らの役目は前線の維持、及び時間稼ぎだ・・・

そして、僕はなぜか、この部隊の副隊長を命じられた・・・

そんな役・・僕にはとても任せられないと思うけど・・

そして、秀吉はこの隊の隊長・・つまりリーダーだ・・

一応命令には従うけど、秀吉に命令ってまったく似合わないな

そんな僕の考えをよそに秀吉はてきぱきと動いて部隊の人たちに

命令を下していた・・おおっと・・僕も戦争に参加しなきゃ！

「麗也よ、お主はわしの援護をしてくれ！わしは攻撃にむかうか

ら、

お主はわしの守り役に入ってくれよ？」

「う、うん・・・分かったよ秀吉。」

普段はぼくが秀吉を守る側なのに、こういう場面では僕が

逆に守られてしまう・・・自分の力の無さにとても腹立たしい・・・

い、いや・・・こんな時にイラついちゃ駄目だ！集中しよう、

そして、少しでもこの戦争の状態を良くしよう！

「おい、おい麗也！しっかりせい！今は集中じゃぞ？」

そんな事をいいながら僕の頬を秀吉がパンパンっと手で

たたいてきた・・・よし！もう考え事はよそう！

「ゴメンネ！秀吉！もう大丈夫だから・・・」

「そうかのう？うん？前方から敵じゃ！さっき言ったように  
援護を頼むぞ！それじゃあ、試験召喚獣、サモン！」

「うん！分かったよ！秀吉！」

そういうと、秀吉の足元に幾何学的な魔方陣が現れた・・・

これが召喚獣を出すときの魔方陣か・・・僕はこれで見るのが二度目かな？

そういえば、僕の召喚獣はどんな武器を持っていたっけ？

うーん・・・なにしろ初めて召喚したのは、入学する前の一カ月前だからな。まあ、たぶん弱くないと思うけどさ・・・

「まあ、とりあえず・・・サモン！つと・・・」

僕の足元にも幾何学的な魔方陣が出てきた・・・召喚獣が出てくるまで

秀吉の召喚獣でも見ておこうかな？

うーんと・・・秀吉の召喚獣の武器は・・・大きな長刀に服は弓道着

のような服を着ている・・・顔は秀吉がデフォルメされた顔をしている・・・

なんだかとてもかわいらしい・・・おおっと！もう召喚が完了していたようだ・・・

ええっと・・・僕の召喚獣の武器はつと・・・おおすごいな！結構・・・

刀としては短いけど・・・すごい切れ味が良さそうだ！ふう・・・  
・よかった、

よかった。ふくは、なんかよく分かんないけど・・・武装がとてもしてある

鎧みたいだ・・・っておおー！結構強そうだよ！この召喚獣、期

待てるぞ！

そんな事を思っていたら秀吉から声がかかった・・・何だろう？

「麗也はさつきからなにをしておるのじゃ！早く援護をしてくれ！」

「おーっと、ごめん、ごめん！今助けにいくよ！」

そして僕は秀吉が入っているフィールドの中に入った・・・

よーし！さっそくこの召喚獣の強さを見せてやる！

「うん？秀吉くなんか召喚獣の頭の上になにか書いてあるよ？」

「あれは召喚獣の強さを表している、いわばテストの点数じゃな。わしはあまり勉強ができんからあまり点は上では無いんじやが・・・」

そうか、あれが強さか！どれどれ・・・僕の召喚獣の強さは・・・

化学           木下秀吉65点           影譲麗也32点

「お主の召喚獣はなぜそんなに弱いのだ！」

「し、知らないよ！そんなの、僕が聞きたいくらいだよ！」

うーん・・・見た目はあんなに強そうなのに・・・中身があれじゃな

はつきり言って残念だよちょっと・・・

「お、おい！麗也！よそ見をするな！よそ見を・・・」

「へ？」

ザクツ！

「い、痛い！なんで？普通は召喚者にはダメージが無いんじゃないのー！」

「ふむ・・・もしかしたらお主はなにか特別かもしれぬな・・・明久と同じで・・・」

「も、もしかして・・・吉井くんと同じ観察処分者なの？そうだったとしたらへたにダメージはくらってはいけないね！」

「うむ・・・そうじゃのーっとそんなことよりも今は集中せい！」

「はーい・・・」

という事は・・・召喚獣の操作はやりやすいつてことかな？

ちょっと試してみよう・・・

「おっと・・・」

『うわっ！』

お！やはり上手くいったー！これなら点数が低い部分をカバーで



きる！

「麗也、お主なかなかやりよるのう」

『へへ！隙アリーー！！！！』

「あ、危ない！」

バーンっ！

「れ、麗也よ！大丈夫か？」

「う、うん・・・ちよっと手が痺れるけど・・・秀吉は大丈夫かい？」

「う、うむ・・・わしは大丈夫じゃが麗也はそれじゃもうほとんど動けぬぞ？」

「ううん・・・僕はまだ戦えるよ！」

『へへ・・・大分弱ってるぜ・・・これまでだ！死ねー！』

僕はここで終わりか・・・そんな事を思っていた時・・・

「え、援軍じゃ！麗也よ！援軍がきたぞ！」

「よし！秀吉に影譲くん！君たちはもうほとんど点数が無いと思うから点数補充に行ってきた！」

「わかったのじゃ。よし、麗也よ一旦教室に戻るぞい！」

「う、うん・・・分かったよ・・・秀吉」

僕たちは点数補充のために教室に戻った・・・

そして、点数補充をやっていると、いつの間にか戦争は終わって

いた・・・どうやら僕たちの勝利のようだ・・・

「終わったのう・・・麗也よ・・・」

「うん、そうみたいだね・・・秀吉」

僕は安心しきったせいか、その場で真っ先に倒れ、

そのまま数分ぐらいぐっすり寝てしまった・・・

## くDクラス戦く（後書き）

いかがだったでしょうか？一応Dクラス戦は終わったのでよかったです！まあ、ほとんど省略とかをしてしまいましたか・・・それでも読んでもらえると僕にとっては嬉しい限りです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3080z/>

---

僕とバカと召喚獣達！

2011年12月20日23時52分発行